鼻腔異物の臨床統計的検討

鼻腔異物は、日常外来でしばしば遭遇する疾患である。病態が単純であり診断も容易であるためか臨床像の分析あるいは多数例に基づく臨床統計的検討についての報告が少ない。

本研究では、1986年1月から1998年12月までの13年間に埼玉医科大学・耳鼻咽喉科を初診し病歴の記載が明らかで診断が確定した鼻腔異物299症例の臨床像につき検討し臨床統計的研究を行った。13年間の鼻腔異物症例は299症例で同時期の新患患者数は55,312名で、新患患者に占める鼻腔異物の割合は、0.54%であった。

異物症例の受診時間帯をみると時間外を受診したのは217症例（72.6%）であった。

性別は、男性172症例（58%）、女性127症例（42%）であった。

受診月別にみると月平均25症例で1月は少なく、11、12月に多く認めた。

検診分布では、平均年齢40.1歳で、生後1ヶ月の乳児から81歳までみられたが6症例を除いては10歳以下の小児であった。

種類別にみると玩具類が多かった、その中でもソフトエアーガンに使用するプラスチック製の球状物が46症例（15.3%）と最も多く、次いでビーズが36症例（12.1%）であった。その他で比較的多く認めたものは、ティッシュペーパー、ボタン、プラスチック製の玩具などであった。

キーワード：鼻腔異物、統計分析、異物の種類
4. 性別（表２）


5. 左右別（表３）

異物の存在側では、右側は166症例（57%）、左側は123症例（42%）で、右側にやや多い傾向を認めた。
めた。また、品目は多岐にわたり、統計85品目に及ぶ。ソフトエアーガンに使用するプラスチック製の球状弾（B・B弾）が46症例（15.3%）と最も多く、次いでビーズが36症例（12.0%）であった。その他に比較的よく認められたものは、動物等の形をした玩具のスポンジ16症例（5.4%）、ティッシュペーパー15症例（5.0%）、ボタン9症例（3.0%）、プラスチック製の玩具類12症例（4.0%）などであった。なお、過去に報告例をみない、歯石2症例、クリップ1症例、箸の先1症例があった。また、異種複数異物11例においては、B・B弾が右側に2個と小石が右側に2個の2症例があった。異種複数異物11例としてはティッシュペーパーと玩具のサイコロが2個挿入されていたものが1症例あった。

検討
外来新患患者に占める鼻腔異物の我々の割合は0.54%
<table>
<thead>
<tr>
<th>表4  種類</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>玩具類</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>B・B弾</td>
</tr>
<tr>
<td>ピーナッツ</td>
</tr>
<tr>
<td>スポンジ</td>
</tr>
<tr>
<td>プラスチック（玉、支柱）</td>
</tr>
<tr>
<td>ブロック</td>
</tr>
<tr>
<td>おもちゃ（詳細不明）</td>
</tr>
<tr>
<td>おはじき</td>
</tr>
<tr>
<td>サイコロ</td>
</tr>
<tr>
<td>ネジ</td>
</tr>
<tr>
<td>発泡スチロール</td>
</tr>
<tr>
<td>ピーナッツ</td>
</tr>
<tr>
<td>以下各1</td>
</tr>
<tr>
<td>食物類</td>
</tr>
<tr>
<td>豆類（大豆、豆）</td>
</tr>
<tr>
<td>ビーナッツ</td>
</tr>
<tr>
<td>ラムネ</td>
</tr>
<tr>
<td>お茶</td>
</tr>
<tr>
<td>グリーンピース</td>
</tr>
<tr>
<td>以下各1</td>
</tr>
<tr>
<td>あり、ガム、こんぺい糖、</td>
</tr>
<tr>
<td>しちみ貝、ゼラチン、煎餅、</td>
</tr>
<tr>
<td>トウモロコシ、ポップコーン、柿の種</td>
</tr>
</tbody>
</table>

であるが過去の報告では、0.3%12)であり、当科で若干高率に認められた。この高率は、当院の地域性に由来すると考えられる。当院の近郊には耳鼻科診療が行われるが、当科に受診する患者が集中する傾向も観察される。年度別分布において1869年、1993年、1994年がその年と比べて少ない傾向にあった。これらは、B・B弾異物が少ないことが関連する。B・B弾と年度別分布の相関係数が0.377（p<0.0001）で相互に強い相関関係が認められた。

受診時間帯では、時間外を受診した患者が多く認められたがそれは、異物を挿入した時間帯と関係があると思われる。玩具類で時間外に受診する症例が他の異物の種類に比べ有意に多く認められた（p値=0.0031）。幼児が日常、玩具で遊んで鼻腔内異物を挿入し家族に告げた時間が夕刻になったので、家族で両親が共働きであれば両親の帰宅後に気づくこととなって入院時間が遅かったのである。

性別では、過去の報告では、男児に多い文献10)13)15)17)もあれば、女児に多い報告14)18)もある。今回は、男児に多い傾向にあった。

左右別では、右利きが多いために右側に多いという過去の報告14)19)や左右別は不明な報告18)がある。我々の報告では、左右側で多く認められた。

なお性別での左右差は認めなかった（p=0.0559）。

月別では、M. Francoisら20)は小児の長期休暇中（7・8月）に多いという報告であったが、今回の結果はそれと異なり、1月に少なく11月と12月に多く認められ、長期休暇中に関連は少なかった。

年齢別分布では、過去の報告によればほとんどどの症例が10歳未満であった10)13)14)18)。我々の結果もこれに一致してほとんどの症例が5歳以下であった。

種類別では、過去の報告によれば球状の玩具類が多く
認められた122)。1986年から1998年までの13年間に経験した鼻腔異物の299症例を臨床統計的に分析し検討した。

2. 年齢別変動は不明であり一定の傾向（増加・減少）は認めなかった。

3. 受診時期帯では、時間外を受診した症例が72.6%であった。

4. 性別、男性35%、女性42%であった。

5. 左右差では、左側42%、右側57%。両側性1%で右側に多く認めた。

6. 月別では、25症例で1年間を通じて一様に認められた。

7. 年齢別では、大多数が5歳以下の小児で283症例（94.6%）であり、中でも23歳が最も多く107症例あった。

8. 異物の種類としては、玩具類が138症例（46.2%）も多く占めた。特に、B・B弾が多く15.4%を占め、次に多く占めたのはビーズで12.0%であった。過去に例をみないものとして破石、クリップ、箸の先などが認められた。

結論
1. 1986年から1998年までの13年間に経験した鼻腔異物の299症例を臨床統計的に分析し検討した。

2. 年齢別発症は不明であり一定の傾向（増加・減少）は認めなかった。

3. 受診時期帯では、時間外を受診した症例が72.6%であった。

4. 性別、男性35%、女性42%であった。

5. 左右差では、左側42%、右側57%。両側性1%で右側に多く認めた。

6. 月別では、25症例で1年間を通じて一様に認められた。

7. 年齢別では、大多数が5歳以下の小児で283症例（94.6%）であり、中でも23歳が最も多く107症例あった。

8. 異物の種類としては、玩具類が138症例（46.2%）も多く占めた。特に、B・B弾が多く15.4%を占め、次に多く占めたのはビーズで12.0%であった。過去に例をみないものとして破石、クリップ、箸の先などが認められた。

文献
1) 和田厚司、前田大郎、川口信也、藤本洋：外耳道・鼻内異物の統計的観察。耳鼻臨床 85：627-633, 1992.
4) 竹本直子、山崎たくみ、中田雅代：小児の外耳道・鼻腔異物。JOHNS 11：1647-1651, 1995.
5) 橋田信宏、佐野光仁、松永亨、松永健：当教室における異物症の変遷。耳鼻臨床 87：1527-1537, 1984.
7) 西川和明、梅博幸、森田守：当科における異物症例の統計的観察。耳鼻臨床 補59：73-78, 1992.
8) 松井利美、山田俊次、村松浩子、斎藤晴澄、川口英洋等：当院における異物症の臨床的観察。耳鼻臨床 89：95-101, 1996.
9) 大橋正貴、木村博之、根本聡彦、菊池秀樹、柴田俊一：耳鼻咽喉科単科病院における異物症例。JOHNS 9：395 400, 1993.
11) 大川美雄：耳鼻咽喉科領域の有生異物症。耳鼻臨床 増2 1105-1175, 1979.

本論文の要旨は第38回日本鼻科学会総会において発表した。

教員等の資料集収の協力に感謝致します。統計的処理につき、木野浩正教授、伊藤典紀助教授にご協力頂き感謝致します。

(2000年4月17日受稿 2000年9月7日受理)
Nasal Foreign Bodies in 299 Cases

Isao Wada, M.D., Haruto Mishima, M.D., Tadashi Hida, M.D.
Yasuhiro Kase, M.D. and Toshitaka Iinuma, M.D.
Department of Otolaryngology, Saitama Medical School, Saitama

Although nasal foreign bodies very commonplace in daily clinical practice, their simplicity in pathology and diagnosis is so unique that case reports based upon a large number have been rather scarce.

We report 299 verified cases of nasal foreign bodies seen during the past 13 years from January 1986 to December 1998, at our institute, together with clinical and statistical analysis. The total number of first visits during the surveyed period was 55,312 and nasal foreign bodies comprised 0.54%.

Of these 217 subjects (72.6%) appeared in emergencies.

Man comprised 172 (58%) and woman 127 (42%), with the right side comprising 166 cases (57%), the left side 123 (42%) and bilateral 3 cases (1%).

In monthly distribution, cases are more often seen in November and December and less often seen in January, with the monthly average being 25.

In age distribution, the majority were seen in those under 10 years old, excluding 6 cases. The average age was 4.0 and the range 1 month to 81 years.

In the majority of cases, foreign bodies remained only a short time (within 24 hour) but in 15 cases stayed rather a long time (over 24 hour).

In specificity, the majority of foreign bodies were toys, with plastic bullets used with air guns most frequent, in 46 cases (15.3%), followed by beads in 36 cases (12.0%). Other foreign bodies seen comparatively often were pieces of tissue paper, buttons, and plastic toys components.

Key words: nasal foreign body, statistical analysis, specificity of foreign bodies

J Otolaryngol Jpn 103: 1212-1217, 2000